

麦野A遺跡 5

— 麦野 A 遺跡第18次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1054集

2009

福岡市教育委員会

麦野A遺跡 5

— 麦野A遺跡第18次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1054集



2009

福岡市教育委員会



調査区全景（直上より、上が大略東）



貯藏穴出土弥生土器・柱状片刃石斧

序

福岡市は玄界灘に面し、古代より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。旧那珂郡の洪積台地上には、旧石器時代以来、人類の活動の痕跡が連綿とみられます。近年の著しい都市化による開発により失われるこれらの文化財を後世に伝えるのは、本市教育委員会にとっての重要な責務であります。

本書は、分譲宅地造成に伴い調査を実施した麦野A遺跡群第18次調査について報告するものです。今回の調査では弥生時代の貯蔵穴・奈良時代の堅穴住居・戦国時代の堀状遺構などを検出するとともに、多数の陶磁器・土器・石器が出土しました。これらは地域の歴史を解明する上で重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、西日本鉄道株式会社をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまで深いご理解と多くのご協力を賜りました。心から謝意を表します。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が宅地造成工事に伴い、福岡市博多区麦野三丁目10番12において実施した発掘調査である麦野A遺跡第18次調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図は橋口達也・阿部泰之が作成した。
3. 本書に掲載した遺物実測図は平川敬治・阿部が作成した。
4. 本書に掲載した挿図の製図は阿部がおこなった。
5. 本書に掲載した写真は阿部が撮影した。
6. 本書で用いた方位はすべて磁北で、真北より $6^{\circ} 30'$ 西偏する。
7. 遺構の呼称は竪穴住居をSC、溝をSD、土壙をSK、ピットをSP、貯蔵穴をSR、性格不明の遺構をSXと略称する。遺構番号は発掘調査の際、現場で任意に振った通し番号を原則そのまま用いている。
8. 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
9. 本書の執筆は第2章第3節を吉留秀敏が、それ以外の執筆および編集は阿部が行った。なお SD04出土のチャートについては宮崎県埋蔵文化財センターの藤木聰氏に玉稿を賜った。
10. 本書掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成6年3月現在の推定線で、現在は変更されている可能性がある。詳細は福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に確認されたい。
11. 本書で報告する調査の細目は以下の通りである。

調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間
0704	MGA-18	1,565m ²	2007.4.23～2007.8.28

本文目次

はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織	1
第1章 位置と環境	3
第2章 調査の記録	5
1. 調査概要	5
2. 遺構と遺物	5
3. 麦野A遺跡第18次調査出土の旧石器資料について	29
4. SD04出土の火打石について	31
第3章 まとめ	32

挿 図 目 次

Fig.1	麦野A遺跡の位置と周辺の遺跡（1/25,000）	
	2
Fig.2	調査区位置図（1/1,000）	4
Fig.3	調査区北壁土層断面実測図（1/200）	5
Fig.4	調査区全体図（1/300）	6
Fig.5	SC06・08・11・13実測図（1/60）	7
Fig.6	竪穴住居出土遺物実測図（1/3）	8
Fig.7	SD04実測図（1/300）	9
Fig.8	SD04土層断面実測図（1/60）	10
Fig.9	SD04出土平瓦・丸瓦実測図（1/3）	11
Fig.10	SD04出土遺物実測図（1/3）	12
Fig.11	SK03・12・16・20・26実測図（1/30）	13
Fig.12	SK05実測図（1/30）	14
Fig.13	土壤およびピット出土遺物実測図（1/3）	14
Fig.14	SU01・07・10実測図（1/60）	15
Fig.15	SU01・07・09・10出土弥生土器実測図（1/3）	
	16
Fig.16	SU14・15実測図（1/60）	17
Fig.17	SU09・31実測図（1/60）	18
Fig.18	その他の貯蔵穴出土遺物実測図（1/3・1/6）	19
Fig.19	SU23・24・25・32・33・37実測図（1/60）	20
Fig.20	SU27・28・30・36実測図（1/60）	21
Fig.21	SU29・34・35実測図（1/60）	22
Fig.22	SX02・22実測図（1/60）	23
Fig.23	SX18実測図（1/60）	24
Fig.24	性格不明の造構出土遺物実測図（1/3・1/6）	25
Fig.25	SX19・21実測図（1/60）	26
Fig.26	麦野A遺跡第18次調査出土石器・石製品実測図	
	（1/3・1/6）	27
Fig.27	麦野A遺跡第18次調査出土先土器時代遺物実測図	
	（1/1）	30
Fig.28	SD04出土火打石実測図（1/1）	31

図 版 目 次

- | | | | |
|-----------|-------------------|-------------|-------------------|
| PL. 1 - 1 | 拡張区全景（南より） | PL. 10 - 1. | SU14土層（東より） |
| PL. 1 - 2 | SC06竈（北より） | PL. 10 - 2. | SU15（東より） |
| PL. 1 - 3 | SC06竈土層（西より） | PL. 10 - 3. | SU15土層（西より） |
| PL. 2 - 1 | SC08（南より） | PL. 11 - 1. | SU15弥生土器出土状況（東より） |
| PL. 2 - 2 | SC11（北より） | PL. 11 - 2. | SU23（西より） |
| PL. 2 - 3 | SC11土師器出土状況（北より） | PL. 11 - 3. | SU23土層（北より） |
| PL. 3 - 1 | SC13（東より） | PL. 12 - 1. | SU24（西より） |
| PL. 3 - 2 | SD04A-A'土層（南より） | PL. 12 - 2. | SU25（西より） |
| PL. 3 - 3 | SD04B-B'土層（東より） | PL. 12 - 3. | SU27（北より） |
| PL. 4 - 1 | SD04C-C'土層（西より） | PL. 13 - 1. | SU28（南より） |
| PL. 4 - 2 | SD04D-D'土層（南より） | PL. 13 - 2. | SU29（北より） |
| PL. 4 - 3 | SK03（東より） | PL. 13 - 3. | SU30（北より） |
| PL. 5 - 1 | SK05（西より） | PL. 14 - 1. | SU31（北より） |
| PL. 5 - 2 | SK12（北より） | PL. 14 - 2. | SU32（西より） |
| PL. 5 - 3 | SK16（北より） | PL. 14 - 3. | SU32石斧出土状況（東より） |
| PL. 6 - 1 | SK20（西より） | PL. 15 - 1. | SU33（西より） |
| PL. 6 - 2 | SK26（北より） | PL. 15 - 2. | SU34（北より） |
| PL. 6 - 3 | SU01（北より） | PL. 15 - 3. | SU36（北より） |
| PL. 7 - 1 | SU01弥生土器出土状況（北より） | PL. 16 - 1. | SU37（北より） |
| PL. 7 - 2 | SU07弥生土器出土状況（北より） | PL. 16 - 2. | SX02（南より） |
| PL. 7 - 3 | SU09東部（南より） | PL. 16 - 3. | SX18東部（北より） |
| PL. 8 - 1 | SU09西部（東より） | PL. 17 - 1. | SX18西部（南より） |
| PL. 8 - 2 | SU09弥生土器出土状況（東より） | PL. 17 - 2. | SX19（東より） |
| PL. 8 - 3 | SU10（北より） | PL. 17 - 3. | SX19敷居状の部分（西より） |
| PL. 9 - 1 | SU10土層（北より） | PL. 18 - 1. | SX21（北より） |
| PL. 9 - 2 | SU10弥生土器出土状況（北より） | PL. 18 - 2. | SX21土層（南より） |
| PL. 9 - 3 | SU14（東より） | PL. 18 - 3. | SX22（北より） |

はじめに

1. 調査に至る経過

2005（平成18）年12月7日付で、福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課（以下、埋文1課）は、西日本鉄道株式会社から、博多区麦野三丁目10番12における宅地造成に伴う埋蔵文化財事前審査願の提出を受けた。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野A遺跡に含まれており、なつかつ旧教職員住宅解体の際に確認調査を行い遺構が確認されていることから、当該地で平成19年1月30日に再度確認調査を実施し、その結果、住居跡・溝・土壤などの遺構を検出した。この成果を元に両者で遺構保全の協議を行ったが、造成工事によって遺構の破壊を免れないため、遺構が残存している部分について本調査を実施することで合意した。その後委託契約を締結し、2007年4月23日から発掘調査、翌2008年度に資料整理・調査報告書作成を行うこととした。

なお、全調査期間を通じて西日本鉄道株式会社並びに板付公民館日永田館長、周辺住民の方々方に様々な便宜を賜り、調査は大きな事故等もなく概ね順調に完了しました。紙上ではありますがここに記して深く感謝申し上げます。

2. 調査組織

調査委託：西日本鉄道株式会社

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査総括：埋蔵文化財第2課 課長 力武卓治（前任） 田中壽夫（現任）

同課調査第1係長 杉山富雄

調査庶務：文化財管理課 井上幸江

事前審査：埋蔵文化財第1課事前審査係長 吉留秀敏

同係主任文化財主事 宮井善朗

同係文化財主事 本田浩二郎（前任） 上角智希（現任） 藏富士 寛（現任）

調査担当：埋蔵文化財第2課調査第1係 阿部泰之（現・埋蔵文化財第1課）

調査作業：中村宏 石川洋子 北条こず江 水田ミヨ子 林厚子 兼田ミヤ子 野田淳一 村山巳代子 加藤常信 遠山歎 濱地静子 岡部安正 相川春彦 平田周二 永田とみ子 御手洗史子 浦崎てい子 日高芳子 増田ヒロ子 渡部律子 林春治郎 橋口達也

整理作業：窪田慧 黒早苗

なお、8月8日・9日にわたって県立筑紫丘高等学校郷土研究部の久我先生、当時2年3組の源五郎丸さんが発掘調査に体験参加されました。暑いさなかに事故もなく、懸命に作業に打ち込んでいたことに感謝申し上げます。

本書掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成6年3月現在の推定線で、現在は変更されている可能性がある。詳細は福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課に確認されたい。



Fig.1 麦野A遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

1. 麦野A道路 2. 比恵道路群 3. 那珂道路群 4. 五十川道路 5. 井尻A道路 6. 井尻B道路 7. 那珂君休道路 8. 板付道路 9. 高畠道路 10. 諸同A道路 11. 諸同B道路 12. 寺島道路 13. 接原道路 14. 三筑道路 15. 麦野B道路 16. 麦野C道路 17. 南八幡道路 18. 雅鶴園道路 19. 笠挂道路

第1章 位置と環境

現在の福岡市の中心的位置を占める福岡平野は、背振山系から発した那珂川と牛頸・四王寺山地から発した御笠川によって形成された沖積平野である。現在は市街化が進み旧状はほとんど窺えないが、もとは広大な農村地帯であった。この平野には所々に春日方面から延びる低丘陵が位置する。これらはAso-4火山層と呼ばれる阿蘇カルデラ起源の火砕流堆積物によって形成され、雨水・湧水の作用によって多くの谷が解析しており、いわゆるヤツデ状の平面形を呈する。麦野A遺跡はこの丘陵地帯の一角に位置する。この丘陵上に位置する遺跡には旧石器時代より現代に至るまで人間活動の痕跡が連続と刻まれ、麦野A遺跡も例外ではない。本来大きなくくりで「麦野遺跡群」としてもよい遺跡だが、福岡市では谷や尾根で3つのまとまりに分け、個別の遺跡として扱っている。今回の調査地点は遺跡が位置する丘陵の東縁辺部に位置する。

周辺で最も古い遺物としては先土器時代の石器が挙げられる。麦野B遺跡第4次調査・雑餉隈遺跡第10次調査に於いていわゆる新期ローム層中に当該期包含層を検出しているが、いずれも散漫な出土で量もわずかであった。しかし南八幡遺跡第12次調査では集中分布域の検出に成功している。

绳文時代の遺構・遺物は周辺を含めても少ない。各調査において石器がわずかに出土しているほか、麦野B遺跡・南八幡遺跡そして今回報告する麦野A18次調査で落とし穴状の土壙が検出されているが、遺物に乏しく時期を明確にしがたい。

弥生時代の遺構・遺物は、麦野C遺跡5次調査において前期末・中期末から後期初頭にかけての集落が検出されている。今回の調査においては前期後半～末頃の貯蔵穴群および方形の住居址が検出されており、台地尾根付近に集落、縁辺部に貯蔵穴群が作られていたと推測される。また雑餉隈遺跡15次調査で早期とされる木棺墓が4基検出され、磨製石剣・石器が出土している。

古墳時代は南八幡遺跡において少数の後期の住居址が検出されているほかに顯著な遺構はなく、弥生時代から連続して集落が営まれる状況ではない。

遺構・遺物とも飛躍的に増加するのは古代以降である。7世紀後半から9世紀初頭にかけて竪穴住居が多数構築され、概ね8世紀代をピークとする。住居址のみならず麦野A遺跡第7次調査では溝・横列に伴う門が検出されており、8世紀後半～9世紀初頭で2時期に分かれるとされる。このほか雑餉隈遺跡では9次調査でL字形の配置をもつ掘立柱建物が2棟検出され、8世紀後半頃とされる。周辺には大宰府・水城・大野城、遺跡の北西に位置する高畠廃寺、大宰府と鴻臚館をつなぐとされる官道のいわゆる「水城東門ルート」など重要な施設が多く、これらの維持・管理等にかかる人々の居住地域とも推測されている。「雑餉隈」の地名起源説話から、大宰府官人の「雑掌」の居住地または倉庫群との関連も指摘されている。古代の遺構は9世紀にはいると急速に減少し、中世に至るまで空白期間が続く。

中世は、第4次調査地で12世紀後半～13世紀初頭の掘立柱建物・土壙、15～16世紀にかけての掘立柱建物・井戸・竪穴状遺構が麦野A遺跡1次調査で検出されている。麦野6丁目地内に位置する日吉神社境内に嘉暦3年(1328年)の銘を刻む板碑があり、中世の集落が丘陵上に存在していたと推測される。

なお今回報告する18次調査において堀状遺構が検出された。周辺の第6次・第9次・第20次調査検出の溝と併せ、折れを有した略方形のプランを持つと推測される。遺物が僅少で時期は明確でないが戦国期とみるのが妥当と思われる。ちなみに近世の編纂物「豊前覚書」に天正9(1581)年に戸次鑑連が麦野村に軍勢を置いたとする記事が見られ、関連が注目される。

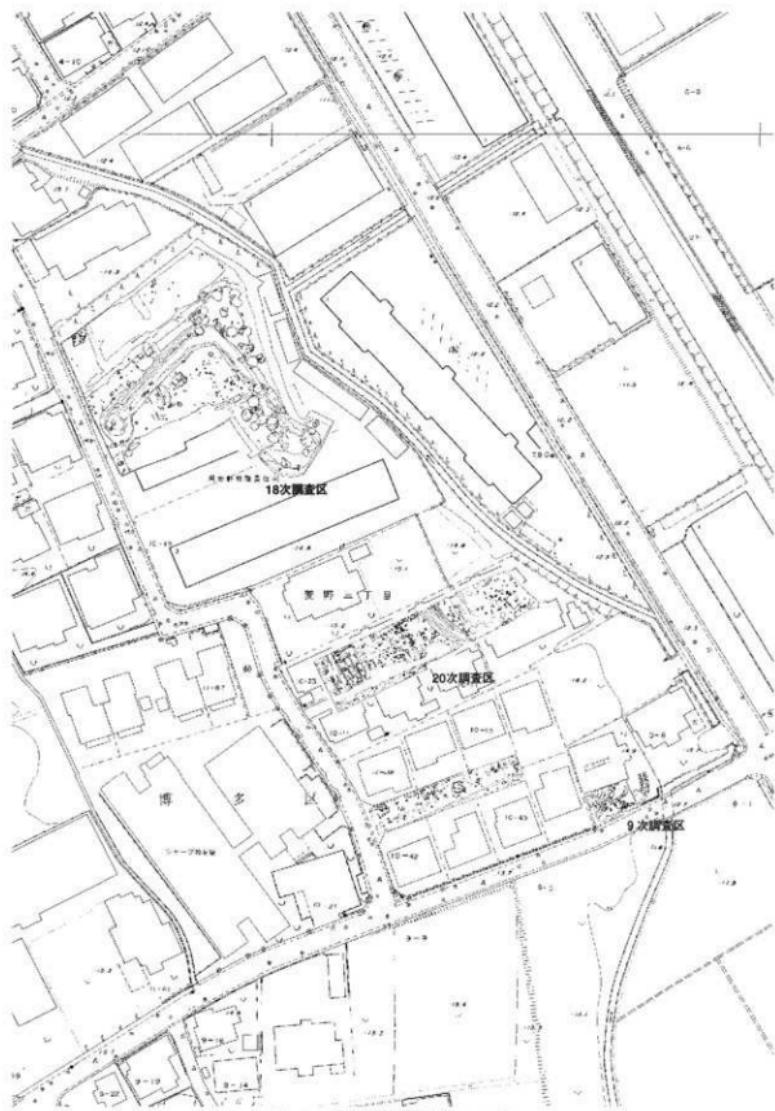


Fig.2 調査区位置図 (1/1,000)

第2章 調査の記録

1. 調査概要

麦野A遺跡は、御笠川と那珂川に挟まれる低丘陵上に立地する。第18次調査区は、丘陵の東の落ち際に位置する。遺構は現地表面直下～-60cm、明褐色ローム層の上面で検出される。調査区北部は削平の結果1m程低く、遺構はほとんどみられない。

今回の調査で検出された遺構は、堅穴住居5軒・大溝（堀）1条・土壙6基・貯蔵穴23基・ピット多数である。今回の調査で出土した遺物は、戦国期の大溝から土師器・瓦質土器・輸入陶磁器が、貯蔵穴から廃絶に際して投げ込まれたと推測される弥生土器（小壺・鉢・蓋）が出土したほか、抉入柱状磨製石斧が1点出土した。また、遺構の埋土に含まれる形で旧石器時代の遺物（ナイフ形石器・チップなど）が少数出土している。

今回の調査では、堅穴住居・大溝・貯蔵穴・土壙等を検出した。堅穴住居は床面まで削平され遺存状況は悪いが、遺物・形態から8世紀後半頃の住居址と推測される。大溝は複数回の掘り直しが認められ、出土遺物から廃絶の時期を類推することは困難である。深く一部クランク状に屈曲する部分がみられ、堀としての機能が推測される。貯蔵穴は台地の落ち際に集中して検出された。出土遺物から弥生時代前期後半から末頃の所産とみられる。深さ2mを測るものがあるなど遺存状況は良好であった。当該期の集落の居住域が台地の西に存在したと推測されるが、遺構面の削平が大きく弥生前期の住居址は1軒であった。

2. 遺構と遺物

①堅穴住居（SC）

SC06 (Fig.5)

調査区中央部で検出した。削平の結果深さ10cmと残りは悪いが、方形の住居址となろう。残存する部分からプランを推定すれば、南北3.6m・東西4.1mの長方形となる。主柱穴は4基の柱穴が予想されたが、2基の検出にとどまった。東側の1基は径15cmの柱痕跡を有する。竈跡は南東部に1基検出された。周壁から半月状に張り出す形で、径45cmの略円形のプランを有する。断面図を示す。住居址堀方底面から深さ20cm掘り下げ、それを埋めてから竈を構築している状況が窺える。

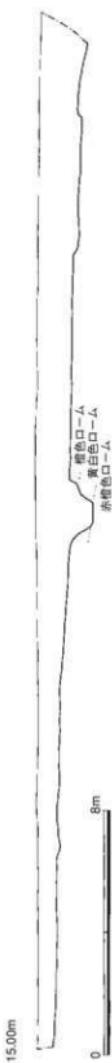


Fig.3 調査区北縁土層断面実測図 (1/200)

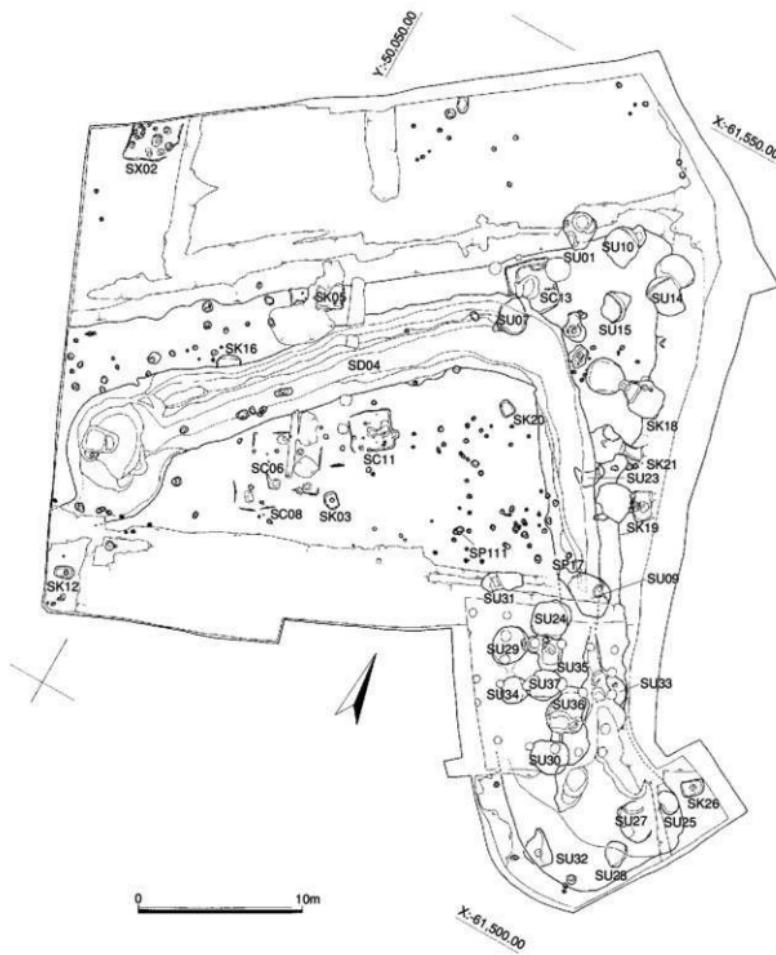


Fig.4 調査区全体図 (1/300)

さらに、東側の床面には人為的に土を厚さ7cmに貼っている。貼り床のように床全面に広がるものではなく、ベッド状造構と推測される。竈のある南壁までは延びず、東壁北半にのみ設けられたと推測される。この住居址は堀方底面を床面としており、貼り床は検出されなかった。

出土遺物 (Fig. 6)

何れも須恵器である。1は壊である。口縁部から体部にかけての小片で、口径14.8cmに復元され

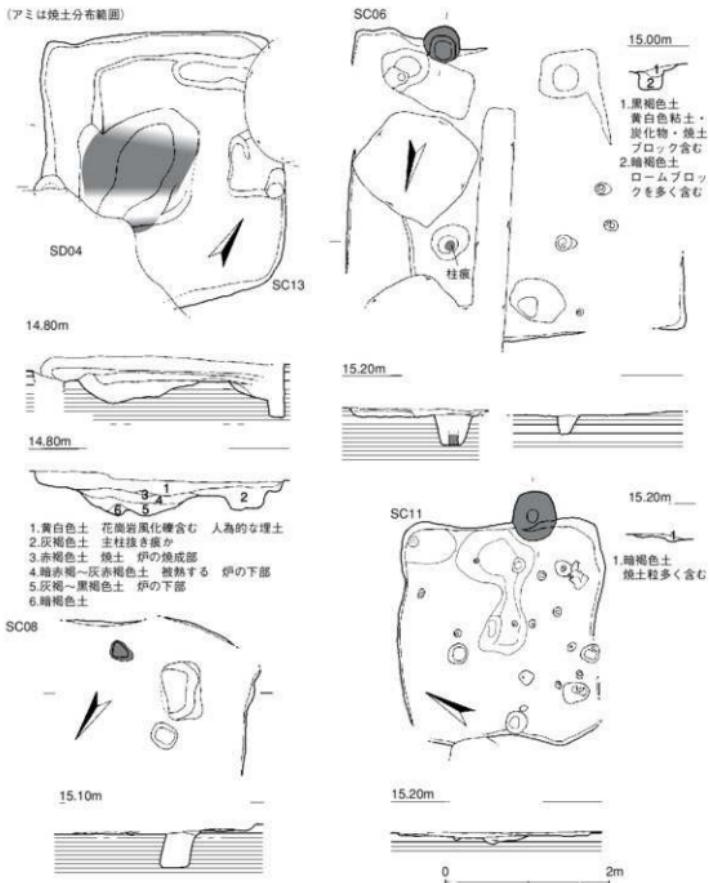


Fig.5 SC06・08・11・13実測図 (1/60)

る。胎土は灰白色で焼成は甘い。2は高台付き壺である。底部から体部にかけての小片で、底径6.4cmに復元される。高台の貼り付け痕がよく観察される。3は蓋である。口縁部の小片で、残存高1.4cmを測る。

SC08 (Fig.5)

調査区中央部にて検出した。後世の削平により南西隅角のみ残存する残りの悪い住居址だが、残存状況から方形のプランを有すると推測される。堀方底面に貼り床を施し床面を構築する。壁溝は検出されなかった。床面直上に焼土粒を含む粘質土が出土したが、被熱部分は認められず窓かどうかは現場では確認できなかった。床面にて貼り床を切る平面略長方形のピット1基を検出、暫定的に主柱穴

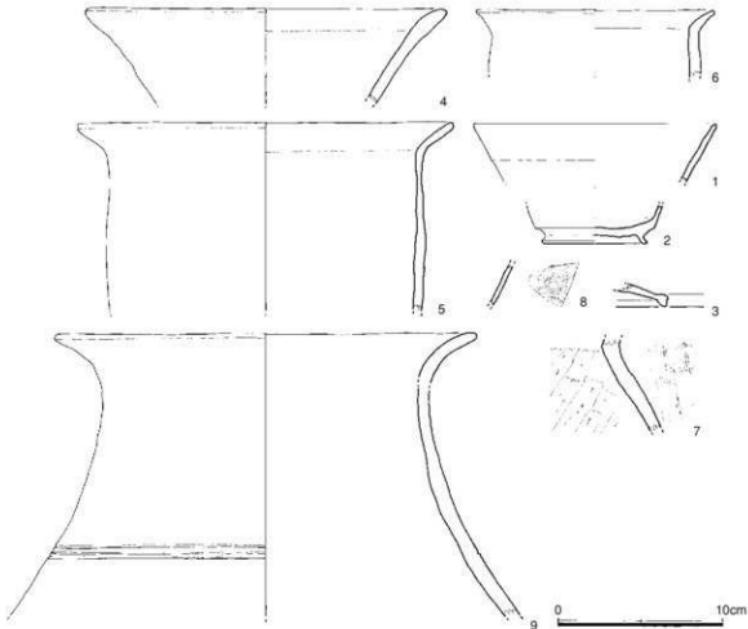


Fig.6 積穴住居出土遺物実測図 (1/3)

とした。深さ45cmを測る。

出土遺物 (Fig. 6)

4は土師器甕または鉢である。口縁部から胴部上半にかけての小片で、口径22.2cmに復元されるが、小片のため不確実である。器壁は磨滅が著しい。内面にはヘラケズリ痕が観察される。

SC11 (Fig. 5)

調査区中央部にて検出した。周壁が一部欠損するなど大きく削平されるが、方形のプランを有する比較的小規模な住居址である。南北2.4m・東西2.8mを測り、平面プランは概ね正方形となろう。主柱穴は底面に複数のピットが検出されているがいずれも浅く、住居址の外に存在する可能性も考慮し精査したが現場で確認することはできなかった。堀方底面には凹みがあるが、そこに貼り床が施され、床面はフラットに保たれる。壁溝は検出されなかった。底面までの深さは5cm前後である。東壁南よりに竈を有する。平面梢円形に焼土の分布が観察され、周壁の外に過半を突出させる配置である。断面をFig.5に示す。焼土を含む埋土の直下で地山となり、被熱部分が検出される。

出土遺物 (Fig. 6)

5～7は土師器甕である。5は床面直上にて出土した。底部を欠く破片で、口径23.0cmに復元されるが小片のため不確実。器壁は磨滅著しく調整は不明である。6は口縁部の小片で、口径14.6cmに復元される。5より厚手だが器壁は磨滅著しい。7は竈内出土。頸部の小片で内面にはヘラ削り痕

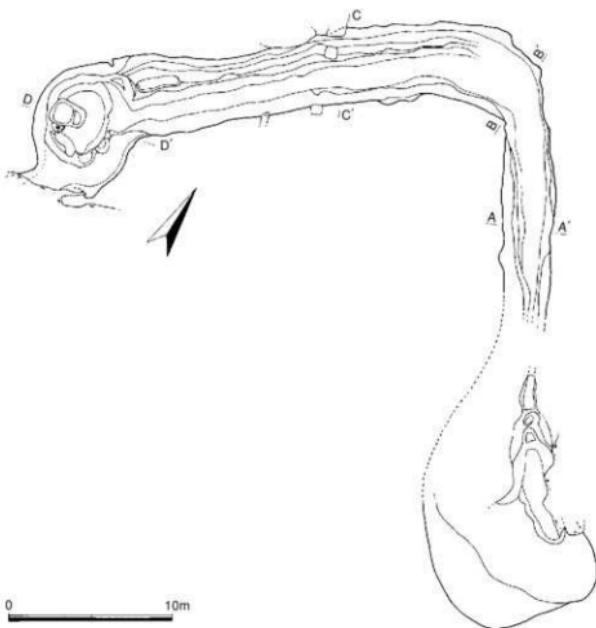


Fig.7 SD04実測図 (1/300)

が観察される。8は須恵器である。坏か。薄手だが焼成良好で胎土は堅緻である。

SC13 (Fig. 5)

調査区北部にて検出した。戦国期の堀SD04と搅乱に切られ、2箇所の隅角を失うが、平面方形の住居址となろう。土層断面をFig.5に示す。埋土は黄白色軽石混じりのロームの下部の土で、人為的に埋めていることは明らかである。平面形は東西2.9m・南北3.4mを測り、わずかに南北に長い。主軸は西に振れ、丘陵の等高線に合わせて構築されていると推測される。北壁から西壁にかけて地山を削り残す形でベッド状遺構が構築される。底面からの比高差は15cm程度である。主柱穴は東西周壁の中央やや南よりに2基検出された。東柱穴で堀方上端から深さ65cmを測る。柱痕跡は検出されなかった。底面中央に軽石を検出した。平面は長軸を南北に持つ不整規円形で、断面からは堀方掘削後一旦埋め、その上で火をたいている状況が窺える。炭化物はほとんどないが焼成面はよく被熱している。貼り床は検出されず、床面の硬化も認められない。直近に貯蔵穴SU07が構築されているが、SD04のため直接の切り合いがわからず、先後関係は不明である。

出土遺物 (Fig. 6)

9は弥生土器壺である。胴部以下を欠く破片で、口縁部下は一部推定復元した。口径25.8cmに復元され、頸部下部に3条の沈線が巡る。器壁は磨滅が著しく調整は不明瞭である。

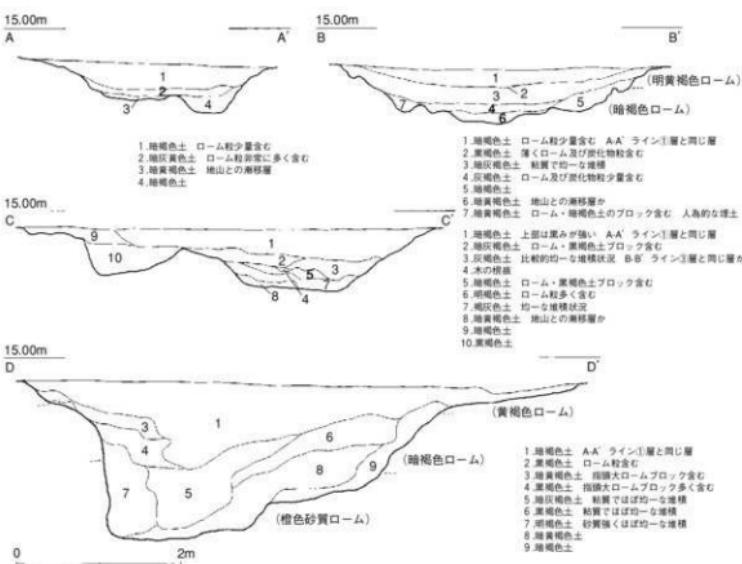


Fig.8 SD04土層断面実測図 (1/60)

②溝 (SD)

SD04 (Fig. 7)

調査区中央から南部にかけて検出した溝である。幅は狭いところで2.5m、広い箇所では7m以上を測り、深さは深い部分で2mと非常に大規模な溝である。平面形は大略L字形だが、西で南方にクラシクし、南端で東に屈曲するなど複数の折れが認められる。断面形は何れの部分でも概ね逆台形を呈し、北及び西・東壁は南壁に比し角度が急である。土層断面をFig.8に示す。不整合や底面に島状の高まりが観察されるセクションがあり、複数回の掘り直しがなされたことが窺える。各断面の観察から、初期の溝は浅いが、その後の掘り直しで深く広く改修されており、その溝においても掘り直しが想定される。注目されるのはD-D'セクションで、地山のロームの下部層をブロック状に含む土が南から流れ込んでおり、溝の南側に土壙様の施設が構築されていたと推測される。埋土はすべて自然堆積で、何れのセクションにおいても人為的に埋められた堆積層は認められなかった。

出土遺物 (Fig. 9・10)

(Fig.9) 何れも瓦である。1は丸瓦である。2・3は平瓦の小片である。1・2は凹面に布目、凸面に繩目叩き痕を有し、3は斜格子叩きが観察される。焼成は甘く胎土は黄褐色～灰白色を呈し軟質である。(Fig.10) 1～8は土師器である。1は小皿で4/3個体残存する。口径8.1cm・器高1.4cmを測る。2は壺で口縁部の大半を欠損する。口径13.2cm・器高3.2cmに復元される。3は小皿である。口径部の小片で、口径7.8cmに復元される。4・5は壺である。何れも底部のみ残存する破片で、4は底径8.0cmを測る。外底面には回転糸切り痕が残る。5は底径7.6cmを測り、外面にススが残る。6は小皿の小片。口径7.6cmに復元される。7・8は壺である。7は1/3個体残存する破片で、口径11.6cm

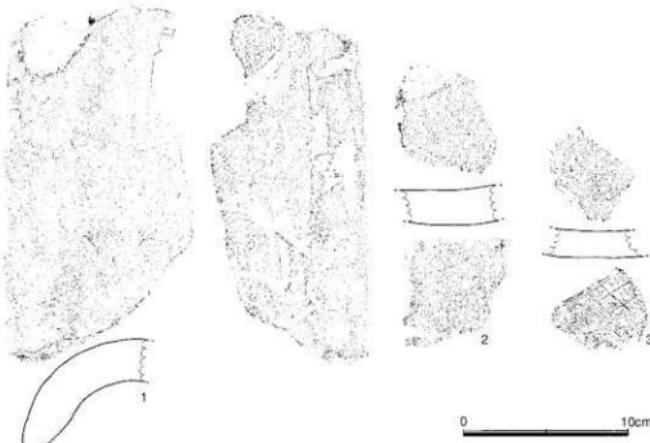


Fig.9 SD04出土平瓦・丸瓦実測図 (1/3)

に復元される。8は1/4個体残存し口径12.4cmを測る。何れの個体も外底面は回転糸切りと推測されるが磨滅著しく観察は困難である。9は須恵器坏の小片である。口径13.6cmに復元され、焼成は良好で堅緻である。10は同安窯系青磁皿の小片である。底径5.6cmに復元される。11は龍泉窯系青磁碗である。底部の小片で、底径6.2cmに復元され器表に氷裂、内面見込みに印刻を有する。12は越州窯系青磁碗である。底部の小片で、底径8.4cmに復元される。内面に目痕を有し釉は薄く光沢がない。13は褐釉陶器瓶である。底部の小片で、底径7.4cmに復元される。被熱したためか器壁は灰色を呈し、釉は剥落し透明感を失う。14は龍泉窯系青磁碗である。底部の破片で、底径5.1cmに復元される。外底面を除き透明感ある灰緑色の釉がかかる。15は褐釉陶器である。底部が完存する破片で、外底面中央が円錐状に突出し安定しない。底径7.2cmを測る。底部を含む外面に暗褐色の釉が薄くかかる。16は龍泉窯系青磁碗である。小形品の小片で口径9.0cm、底径2.6cmに復元され、器高3.9cmを測る。外底面を除き透明感ある淡灰緑色の釉がかかる。17は同安窯系青磁皿である。小片だが口径9.4cm、底径4.2cmに復元され、器高1.9cmを測る。被熱したためか灰緑色の釉は透明感を保つが氷裂の部分が黄変している。内面に擦痕は少ない。18は瓦質土器鉢である。底部の小片で、底径14.4cmに復元される。器壁は磨滅し調整その他は不明である。19は備前焼鉢である。口縁部の小片で、口径29.0cmに復元される。内面に4条1単位の描目を有する。被熱したためか全体に橙色を呈する。20・21は土師器鍋である。いずれも口縁部から胴部にかけての小片で、外面にはススが付着する。20は口径33.2cmに復元される。21は口径33.6cmに復元される。器壁は磨滅し調整その他は不明瞭である。いずれも小片のため口径の数値は不確実である。22・23は瓦質土器である。耳の部分で、おそらく釜の一部と推測される。棒状の原体に粘土を巻き付けて孔を成形している。23は鉢の口縁部の小片で、残存高4.5cmを測る。器壁は磨滅し調整その他は不明瞭である。胎土は灰白色で焼成はやや不良である。

③土塙 (SK)

SK03 (Fig.11)

調査区中央部、古代の住居址群に近接した地点で検出した。平面形は不整な隅丸長方形で、深さ

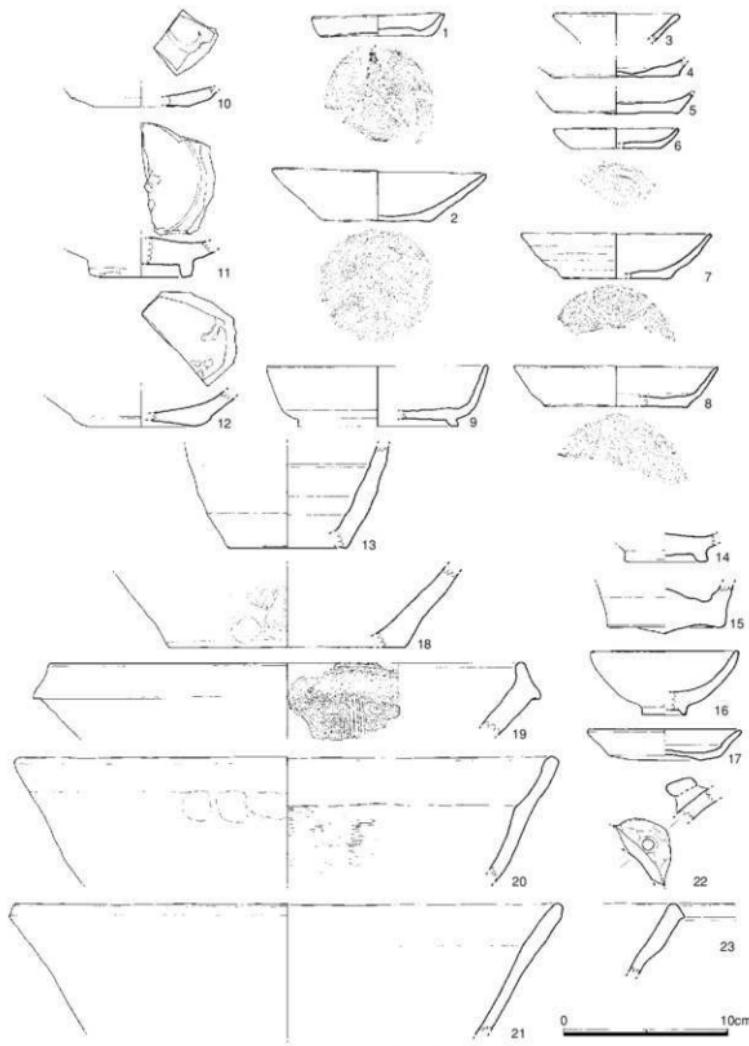


Fig.10 SD04出土遺物実測図 (1/3)

90cmを測り、底面ほぼ中央に径25cmの略円形、深さ40cmのピットを1基有する。底面は南縁辺部にわずかにテラスを有するがほぼフラットである。土層断面からは自然に埋没した状況がわかる。遺

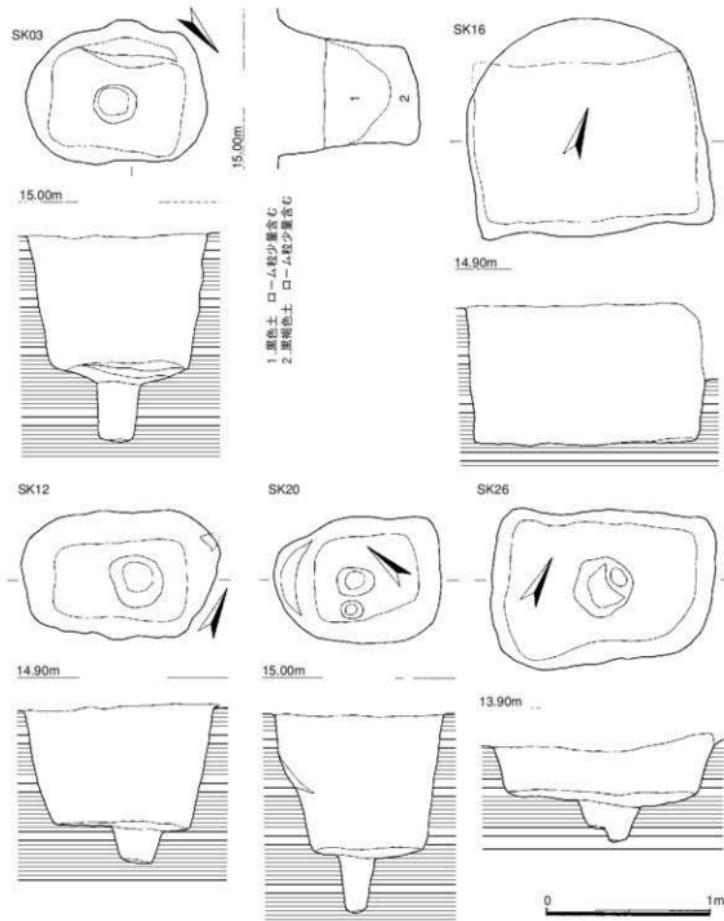


Fig.11 SK03・12・16・20・26実測図 (1/30)

物は出土しなかった。埋土と壁面の境界はやや漸移的で、時期の古さを窺わせる。

SK12 (Fig.11)

調査区南西隅にて検出した。平面は不整楕円形を呈し、深さ約70cmで底面に達する。壁面北東角に幅約15cmのテラスが設けられ、ステップ状を呈する。底面は概ねフラットで、中央やや東よりに径30cmの不整円形、深さ約25cmのピットを1基有する。埋土は黒褐色土で、下部は暗褐色を呈しローム粒を含む。遺物は出土しなかった。

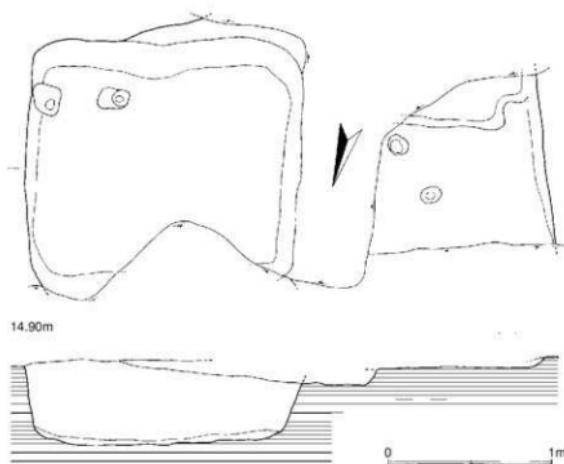


Fig.12 SK05実測図 (1/30)

SK16 (Fig.11)

調査区西部で検出した。SD04に切られる。平面形は大略円形を呈するが、底面はほぼ長方形となる。深さ約90cmを測る。埋土はクロボク状の黒褐色土で、下部は漸移的に底面に移行しており時期の古さを窺わせる。遺物は出土しなかった。

SK20 (Fig.11)

調査区東部、SD04の屈曲部付近で検出した。平面形は不整形形で、深さ約85cmで底面に達する。北西壁面中ほどに三日月状の段を有し、底面はほぼフラットである。底面中央やや東よりに長径25cm



Fig.13 土壌およびピット出土遺物実測図 (1/3)

深さ35cmを測るピットを1基有する。埋土はクロボク状の黒褐色土である。遺物は出土しなかった。
SK26 (Fig.11)

調査区南東端部で検出した。平面形は不整な隅丸長方形を呈し、深さは削平のためか浅く、約35cmで底面に達する。底面はほぼフラットで、中央にピットを1基有し、径約40cmを測る略円形を呈し、底面にテラスを有し深さ約25cmを測る。埋土はクロボク状のしまりのない黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

SK05 (Fig.12)

調査区北部にて検出した。南北を搅乱に大きく壊され遺存状況が悪く、性格は不明である。当初住居地の可能性も考慮し掘り下げたが竈・壁溝などは認められず住居地の要件を満たさないため暫定的に土壌として報告するものである。東西3.2m、南北1.6m以上を測る隅丸方形の土壌で、底面は概ねフラットだが東側が深く、約50cmで底面に達する。深さがあまりに異なるため切り合いの可能性も考慮したが、現場では確認できなかった。埋土はロームブロックを含む黒褐色土の単層で、人為的に埋められた可能性があり壁面とは明瞭に区分される。

出土遺物 (Fig.12)

1は須恵器である。高台付き壺の小片で、口径14.3cm、底径9.8cmに復元されるが、小片のため不確実である。器高4.0cmを測る。

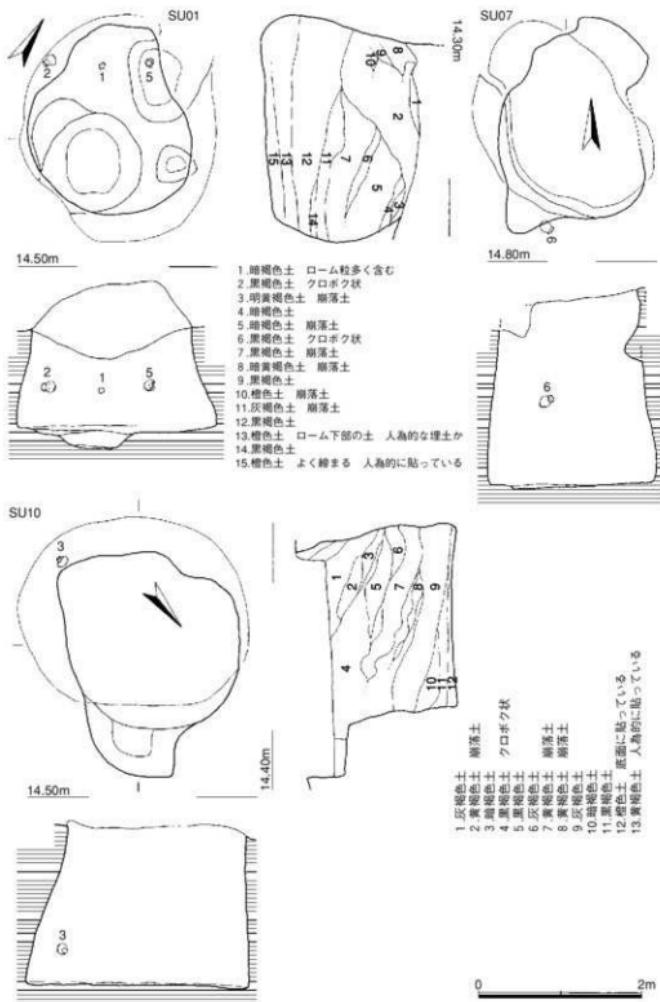


Fig.14 SU01・07・10実測図 (1/60)

④ピット出土の遺物 (Fig.12)

器種が判然とする遺物を2点図示した。2は須恵器である。SP111出土。高台付き壺の小片で、底径8.8cmに復元される。3は土師器である。SP17出土。碗の底部の小片で、残存高1.7cmを測る。器壁は磨滅し調整その他は不明瞭である。

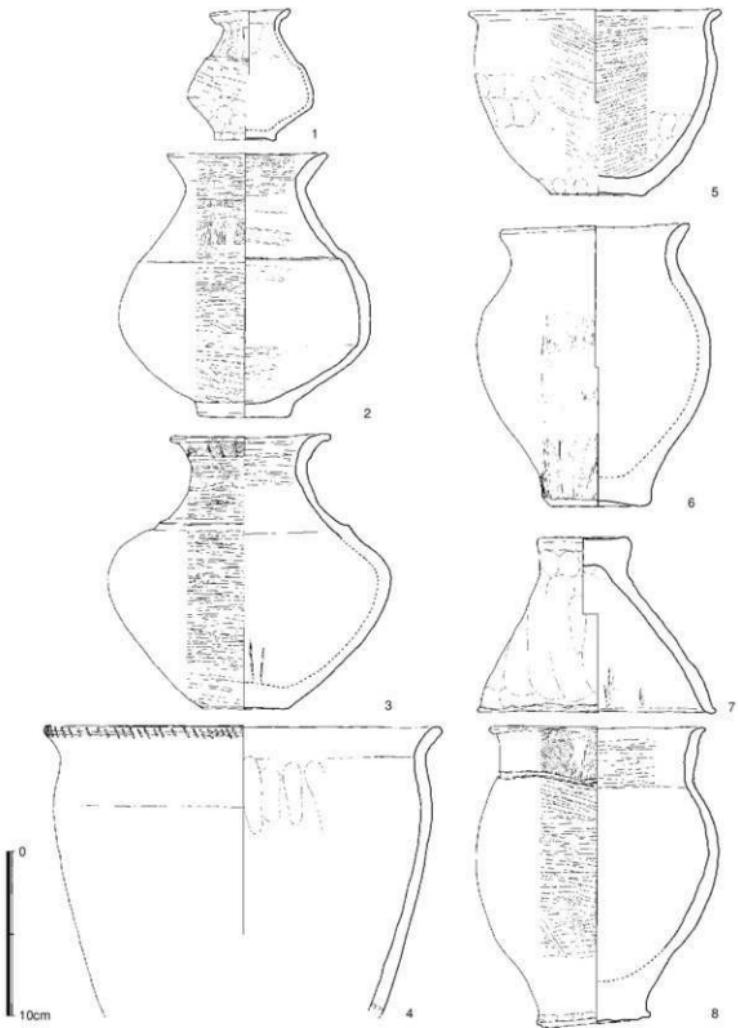


Fig.15 SU01・07・09・10出土弥生土器実測図 (1/3)

⑥貯藏穴 (SU)

SU01 (Fig.14)

調査区北東部にて検出した。平面形は不整円形で、壁面は南方に広がる不整な袋状を呈する。底面

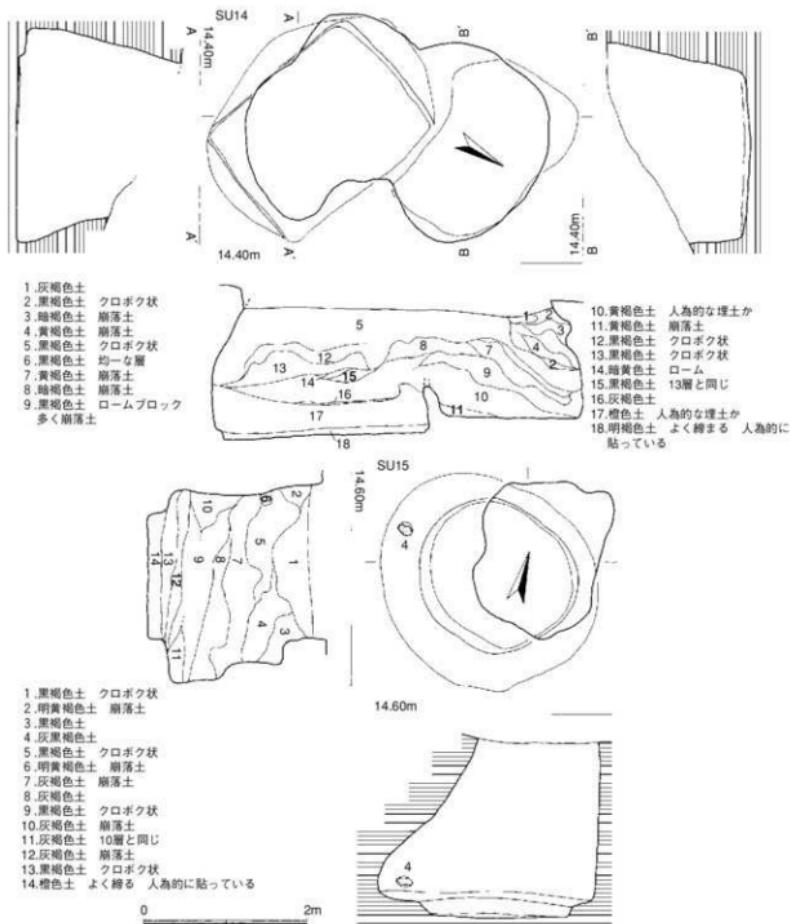


Fig.16 SU14・15実測図 (1/60)

には不整な凹みが3箇所認められるが、ピットと呼べるものではない。埋土は上部がクロボク状の黒褐色土と崩落土とみられるローム土の互層、下部がロームをブロック状に含む人為的に埋めたとみられる土である。上下埋土の境界から遺物が3点出土した。

出土遺物 (Fig.15)

いずれも弥生土器である。1はミニチュア壺である。口縁部をわずかに欠損し器高8.0cmを測る。頸部にはヘラで暗文が施され、胴部は板状工具によるナデである。2は小壺である。口縁部を数カ所

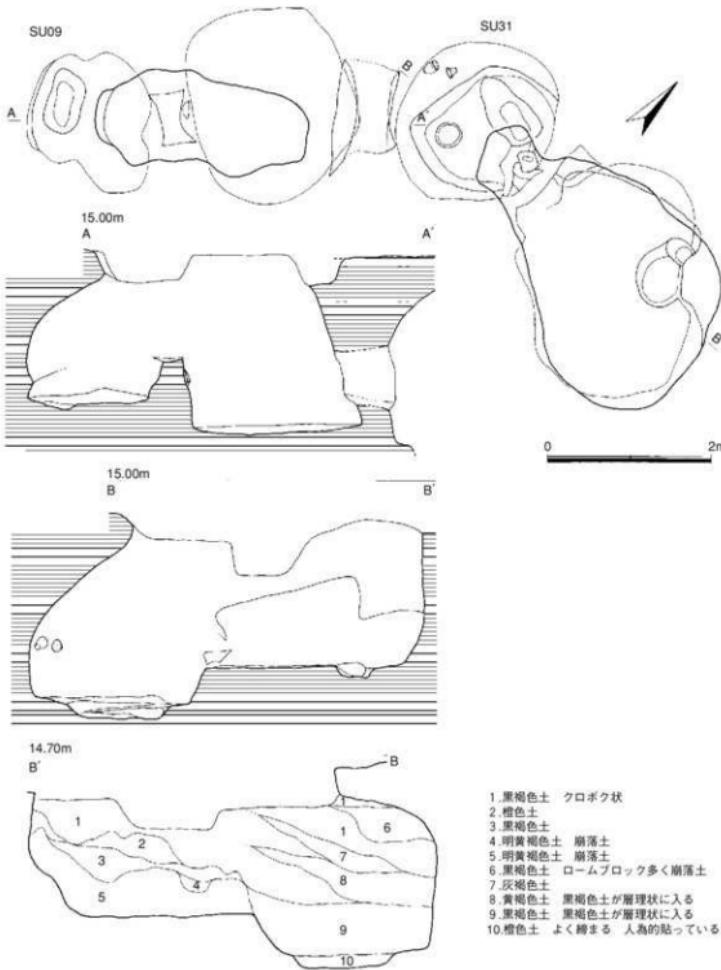


Fig.17 SU09・31実測図 (1/60)

欠損するがほぼ完形である。器高16.2cmを測る。口縁部および外面は密なヘラミガキが施される。外底面には木の葉状の痕跡があるが、磨滅のため不明瞭である。3は鉢形土器である。これも口縁部の一部を欠き、口径15.1cmを測る。器壁は磨滅するが横方向のヘラミガキが内外両面にみられる。4は壺である。

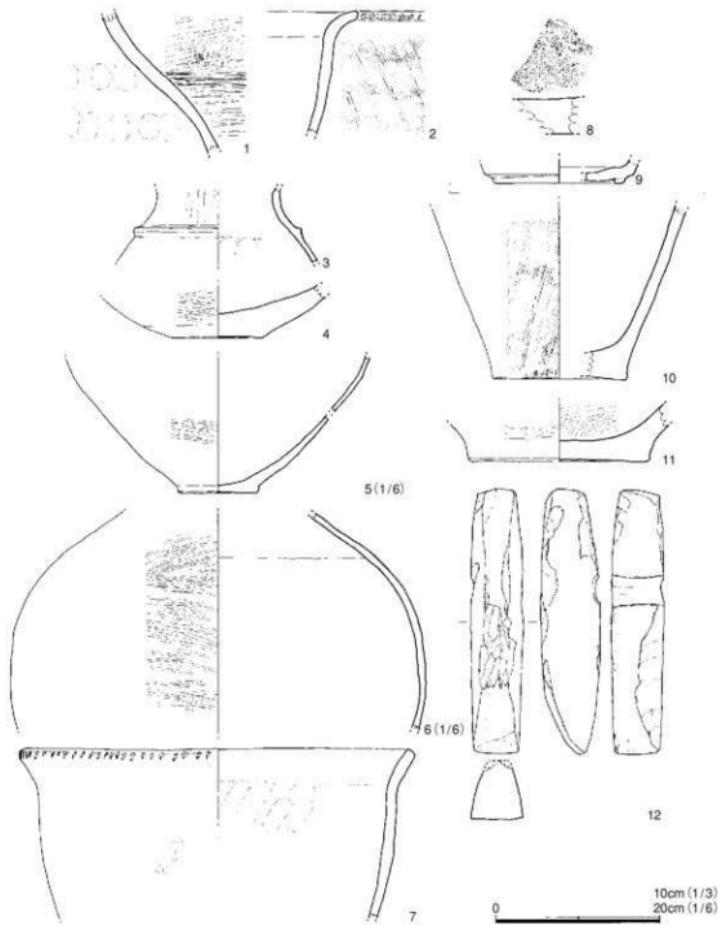


Fig.18 その他の貯蔵穴出土遺物実測図 (1/3・1/6)

底部を欠く小片で口径23.6cmに復元される。器壁は剥落し調整その他は不明瞭である。

SU07 (Fig.14)

調査区北東部にて検出した。SD04に切られ、掘り下げ後に検出した。袋状の貯蔵穴だが壁面のハングは緩い。土層断面からは底面にローム土を貼っている状況がみられ、床面を意図的に整えている。堀方底面は八女粘土に達し湧水することも関係するのか。土層第7層から以下の土器が出土した。

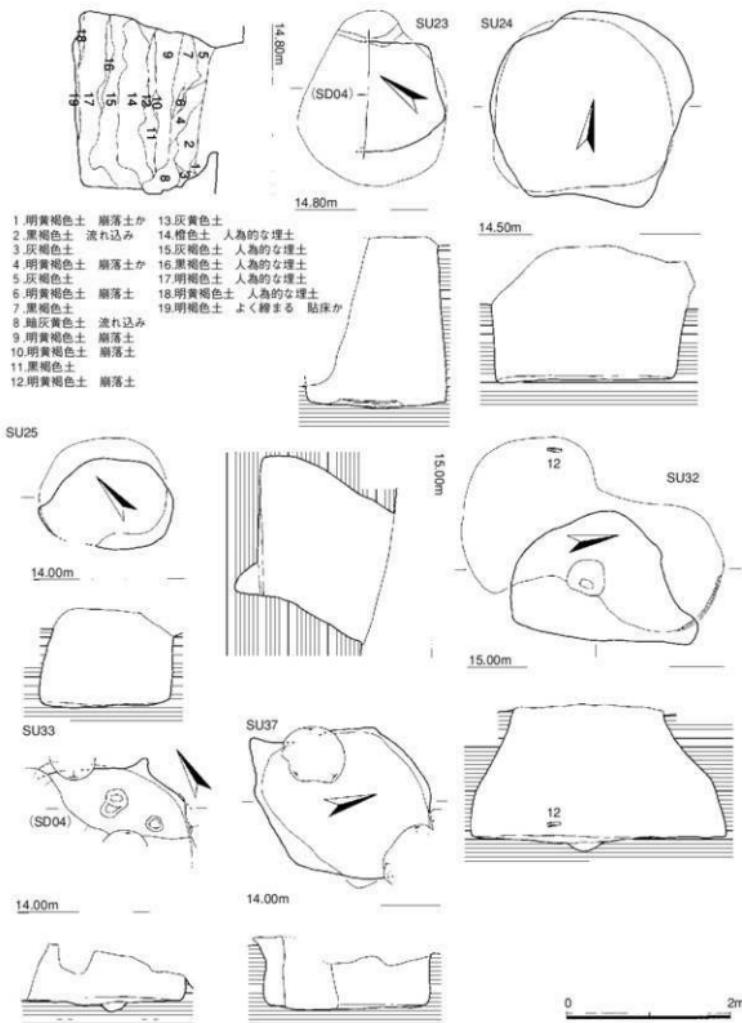


Fig.19 SU23・24・25・32・33・37実測図 (1/60)

出土遺物 (Fig.15)

6は弥生土器甕である。形態は半島系無文土器に類似するが、外面調整・胎土は北部九州の特徴を有し、半島からの搬入品ではないと推測される。口縁の一部を欠損する以外はほぼ完形である。

SU09・31 (Fig.20)

調査区南東部にて検出した。当初個別の貯蔵穴と考え調査していたが、両者をつなぐ通路を検出するに至り一連の貯蔵穴となった。出入り口1つにつき2室を1単位とし、それが2つ通路で繋がっている状況である。土層はSU09とした部分しか示せないが、埋土は黒褐色土と壁面が崩落したローム土の互層で、人为的に埋めた痕跡は窺えない。SU31部分も同様の堆積状況であった。SU09西側の1室は、底面中央部を15cm程度掘り窪め、ローム土を貼って床面を構築している。この貼り床上でピットが1基検出された。貼り床を切って構築され、堀方底面で止まる。出入り口から離れているため梯子設置のためとは考えがたく、用途は不明である。

出土遺物 (Fig.15)

何れも弥生土器。7は鉢形土器である。出土状況から遺物番号8の蓋として使用されたと推測されるため、蓋として図化した。口縁部を一部欠損するがほぼ完形で、器壁がよく遺存する。8は甕である。器形は半島系無

文土器の特徴を有するが、胎土・調整は北部九州のものであり、頸部に1条沈線を有する。半島からの搬入品とはみなしがたい。この個体も口縁部を一部欠損するがほぼ完形に復元できた。胴部外面下半に焼成時生じたとみられる径5cm程度の剥落痕が観察される。

(Fig.18) 1は弥生土器壺である。肩部の小片で、わずかに丹塗り痕を残し、3条の沈線を有する。

SU10 (Fig.14)

調査区北東部で検出した。SU01・14に挟まれる。底面と出入り口の中心がずれており、杏状の断面形を呈する。南側にテラスを有し、階段状となる。土層断面からは底面に厚さ5~10cmのローム土を貼り、床面を構築している状況が窺える。テラス部にもローム土が貼られているほかは黒褐色土と壁面が崩落したローム土の互層で自然堆積土である。その第9層上面で小壺が出土した。

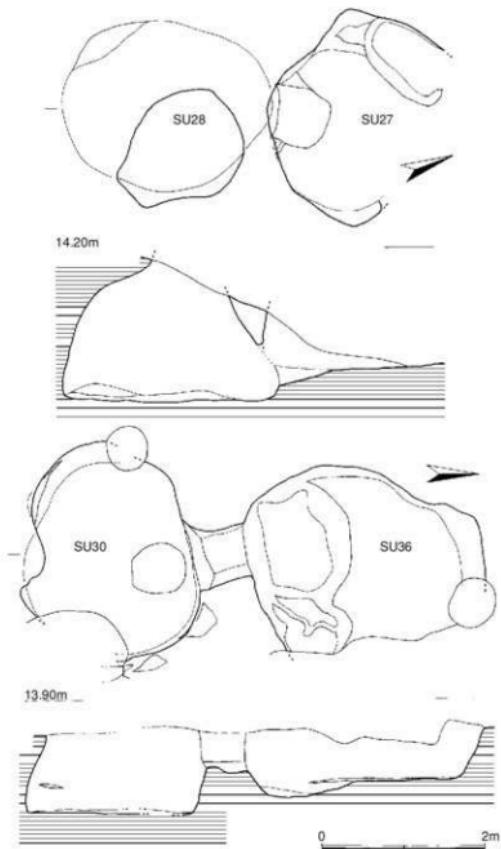


Fig.20 SU27・28・30・36実測図 (1/60)

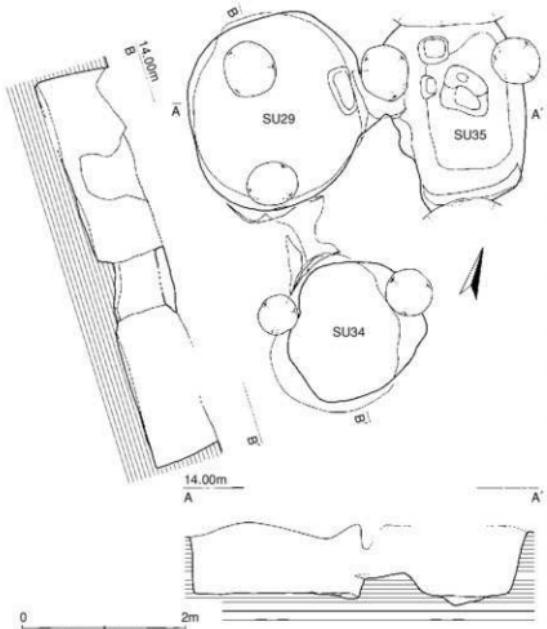


Fig.21 SU29・34・35実測図 (1/60)

は人為的な埋土で、間仕切りの上端付近まで意図的に埋め、その後天井が崩落しつつ徐々に埋没していった状況と推測される。

出土遺物 (Fig.18)

何れも弥生土器。6は壺である。胴部の破片で、胴部径52cmに復元されるが小片のため不確実。7・8は甕である。7は口縁部の小片で、外面は被熱し炭化物が付着する。口径24.2cmに復元される。8は底部の小片で、SU10出土土器と接合した。底径8.2cmに復元され、器壁は被熱せず良好に遺存する。

SU15 (Fig.16)

調査区北東部、SU14の西側で検出した袋状の貯蔵穴である。出入り口と底面の中心がずれており断面は舟形状を呈する。底面は略円形で、中央部を円形に15~20cm掘り下げてローム土を貼り、床面を構築している。埋土は黒褐色土とローム土の互層で、土層断面からは壁面が崩落しつつ自然に埋没したことが窺われる。土層第13層付近で土器が出土した。

出土遺物 (Fig.18)

すべて弥生土器壺である。3は頭部の小片で、胴部との境界に1条の突帯を有する。4は底部の小片。外面は黒色を呈しヘラミガキが施される。5は底部の小片。大型の壺で、底径9.6cmに復元されるが小片のため不確実である。

出土遺物 (Fig.15)

3は弥生土器小壺である。口唇部の大半を欠損するが残りはほぼ完形で出土した。頸部と肩部の境界に1条の突帯を巡らし、胴部下半~底部にかけ黒斑を有する。

SU14 (Fig.16)

調査区北東部、台地の落ち際に検出した。当初2基の切り合いを想定したが、土層断面からは切り合いを窺える不整合等は現場では確認できず、ここでは暫定的に出入り口1箇所に対し南北に2室を有する1基の貯蔵穴として報告する。境界には厚さ15cm程度に地山を削り残して間仕切りを設け、北室は南室に規制されたような平面形となる。南室の底面は中央部を略方形に15cm程度掘り下げ、ローム土を貼って床面を構築している状況である。土層断面第17層

SU23 (Fig.19)

調査区中央東部にて検出した。SD04・SX21に切られる。袋状の貯蔵穴で出入り口直下から大きく掘り広げ、瓶状の断面形をなす。底面の東側に半月状の低いテラスを削り出し、ローム土を厚さ5cm程度貼り付けて床面を構築している。土層断面からは底面から80cm程度まで人為的に埋められ、その後水たまり状になりつつ埋没した状況が推測される。

出土遺物 (Fig.18)

11は弥生土器壺である。底部の小片で、底径10.6cmに復元される。器壁は磨滅するが、内面には密なハラミガキが観察される。

SU24 (Fig.19)

調査区南東部にて検出した。SU35を切る。壁面はオーバーハングせず断面形は逆台形を呈する。底面は略円形で概ねフラットである。貼床は検出されなかった。埋土は上部がロームブロック混じりの黒褐色土、下部が黒褐色土で、上部の土については人為的な埋土の可能性がある。遺物は出土しなかった。

SU25 (Fig.19)

調査区南端部にて検出した。西半をSD04に大きく削られる。袋状の貯蔵穴で底面は北東方向に張り出し、概ねフラットである。埋土は黒褐色土を主体とするほぼ均一な堆積で、自然堆積とみられる。遺物は出土しなかった。

SU27・28 (Fig.20)

調査区南端部にて検出した。当初個別の貯蔵穴と考えて掘り下げていたが、接している状況が確認できた。2基の間には地山が残るため、出入り口はそれぞれ別であったと推測されるが、いずれもSD04に切られ、とりわけSU27は大半が削られた状況のため詳細は不明である。いずれの貯蔵穴も袋状の断面を呈し、底面はやや凹凸を有し、SU27の、SU28と接する部分にはSU28方向に向かうスロープ状の斜面が削り出されている。このことから両者は同時に掘削されたか、SU28がまだ埋没せずに機能している時にSU27が構築され、かつ相互に通行できることが前提であったと推測される。埋土はSU27がローム土のブロックを多く含む黒褐色土で、人為的に埋められたものとみられる。SU28は暗灰褐色土で、ほぼ均一な堆積状況で自然堆積とみられる。遺物はSU28から下記のものが出土したが、埋土上部からの出土であり混入と考えられる。このことからおそらくSU28は埋められずに放置され、古代頃まで凹み状に痕跡が残っていたものと推測される。

出土遺物 (Fig.18)

いずれもSU28から出土した。埋土上部からの出土であり混入と考えられる。8は平瓦の小片である。焼成があまく軟質で磨滅が著しいが、凹面に布目痕が観察できる。9は須恵器高台付き壺である。底部の小片で、底径8.0cmに復元される。

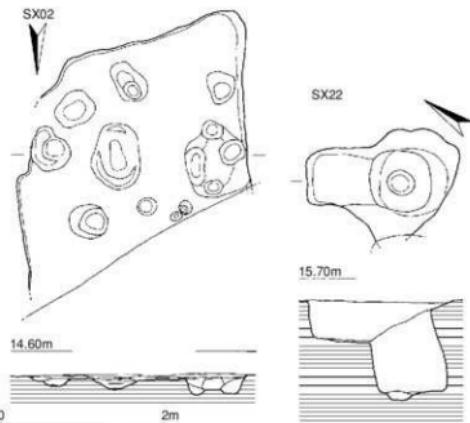


Fig.22 SX02・22実測図 (1/60)

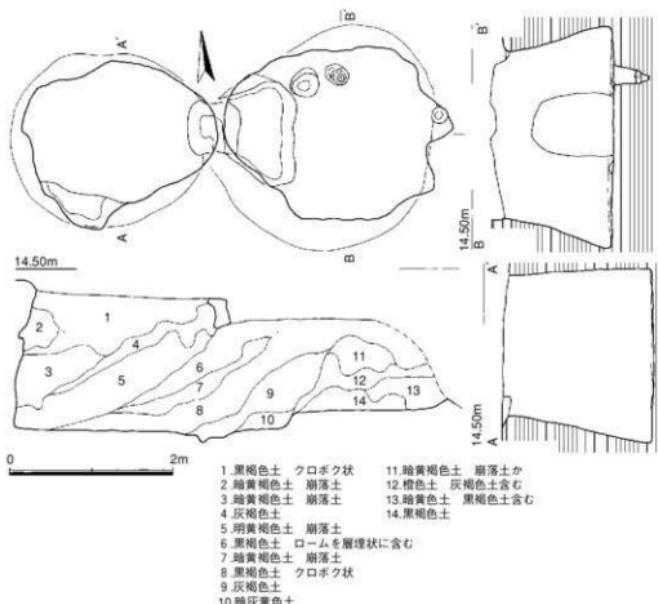


Fig.23 SU18実測図 (1/60)

SU30・36 (Fig.20)

調査区南端部にて検出した。SD04に切られ、既存建物建築時に大きく削平されたため残りは悪く、遺構検出時には両貯蔵穴をつなぐ通路が露出している状況であった。当初切り合いも想定し掘り下げたが、通路の存在と埋土の観察では明確な切り合いが確認されなかつたことからここでは一連の貯蔵穴として報告する。南側に位置するSU30は袋状の断面をなし、底面は概ねフラットである。東壁面に2箇所テラスを有し、踏み台状となる。しかし壁面はオーバーハンプするためそのままではステップとしては使えない。埋土はローム土をブロック状に含む黒褐色土で、人為的に埋めた状況が窺える。北に位置するSU36は逆台形の断面形を呈するが、本来袋状の貯蔵穴が削平された結果と思われる。南壁面にSU30とのトンネル状の連結部が構築される。延長約55cm、横断面が長径60cm程度を測る楕円形で、通路としての機能がまず想定されるが、現代の人間が通行するには狭きにすぎる。底面は概ねフラットだが南側が15cm程度低くなっている。埋土はローム土のブロックを多く含む黒褐色土で、人為的に埋められたものと推測される。底面直上には厚さ約2cm程度の暗褐色土層が検出された。人為的に土を貼って床面を構築していた可能性はあるが、現場では確認できなかった。遺物はいずれの貯蔵穴からも出土しなかった。

SU29・34・35 (Fig.21)

調査区南端部にて検出した。当初複数の貯蔵穴が切り合う状況と考えたが、掘り下げるうち連結部が検出され、3基の貯蔵穴がつながる状況が明らかになった。既存建物のため上部が削平され、杭が打たれるなど遺存状況は悪いが、いずれも袋状の断面を呈し、それぞれ個別の出入り口を有していた

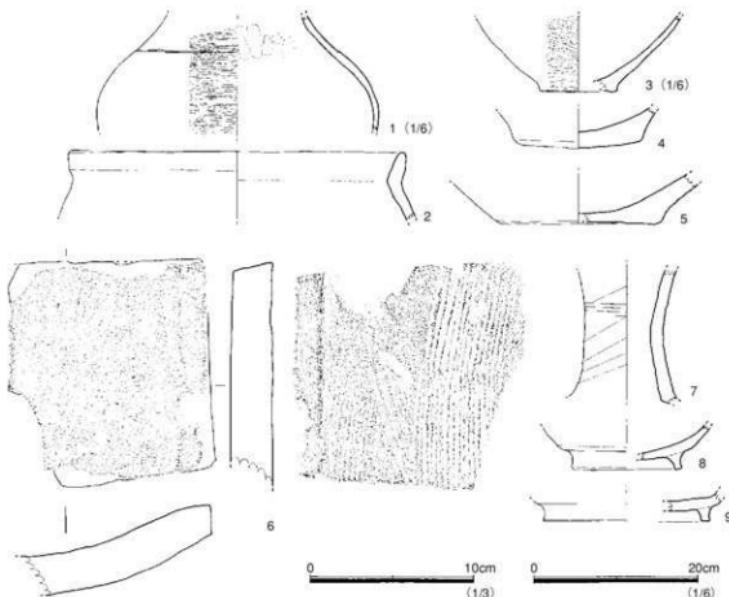


Fig.24 性格不明の遺構出土遺物実測図 (1/3 · 1/6)

と推測される。SU29は概ね円形でフラットな底面を有し、東壁面に検出されたSU35に連なる連結部の入り口は2cm程度低く掘り下げられている。南壁面にはSU34に連なる連結部の入り口がある。底面からの高さはいずれも15cm程度である。SU34はフラットな底面を有する。SU29との連結部は幅80cm・高さ60cmを測り、人間1人が潜れる規模である。SU35は隅丸長方形のプランを有する貯蔵穴である。底面は細かい四凸を有し、中央北寄りに浅い凹み状の部分、北西隅に径40cm・深さ20cmを測るピットを有する。凹み状の部分は遺構とはみなしがたいが、北西隅のピットは梯子を据えた可能性がある。西壁面にSU29との連結部の入り口が設けられ、底面には幅30cm程度のテラス状の凹みが削り出されステップ状を呈する。埋土はいずれの貯蔵穴もローム土のブロックを含む黒褐色土で、人為的に埋め戻されたことが窺える。遺物は出土しなかった。

SU32 (Fig.19)

調査区南端部にて検出した。出入り口より底面が広いゆえ袋状となるが、底面は出入り口と想定される範囲から西に偏り、東西断面は平行四辺形状を呈する。底面は略円形が2つ連結した、いわば鉄アレイ状とも言うべきもので、概ねフラットだが北縁辺部に延長約90cmにわたって幅5cm程度の壁溝状の溝を有する。また東壁中央に接するように1基のピットを有する。径45cm、深さ30cm程度の略円形を呈し、貯蔵穴を検出した範囲つまり出入り口の周辺が崩落した範囲のはば中央に位置する。このことからこのピットは丸木を削りだした梯子を据えるためのものであった可能性が高い。埋土は上部が暗灰褐色土、下部は拳～掌大のローム土のブロックを多く含む黒褐色土で、廃絶時に中途まで人為的に埋められた後徐々に埋没したものと推測される。

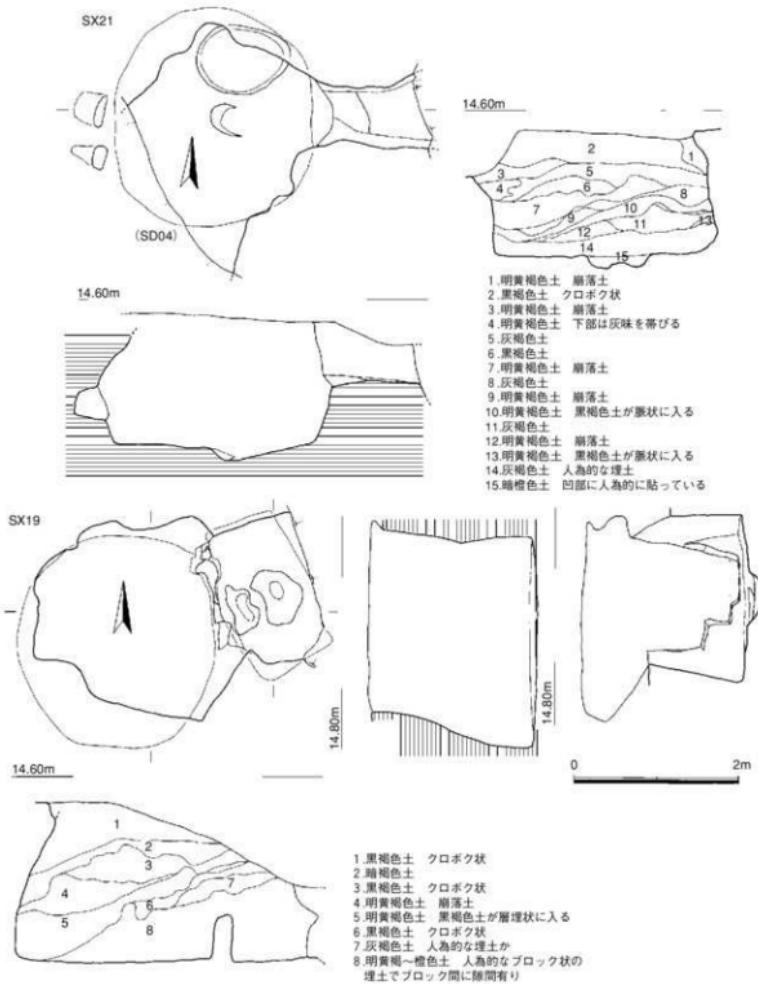


Fig.25 SX19・21実測図 (1/60)

出土遺物 (Fig.18)

2は弥生土器甕である。如意形の口縁部を有する小片で、外面にはわずかにススが付着する。12は抉入柱状片刃石斧である。欠けた箇所もみられるがほぼ完形で出土した。底面から20cm程度浮いて出土し、埋め戻される際に投げ込まれたものか。黄灰～灰色を呈する砂岩質の石材を用い、刃部はよ

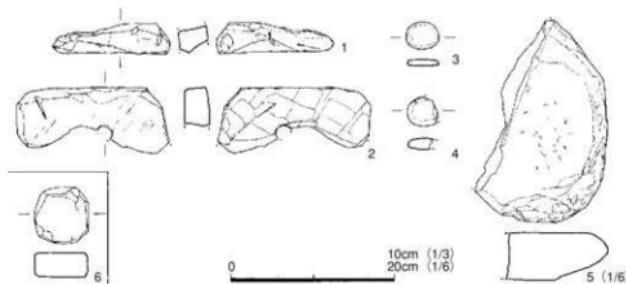


Fig.26 麦野A遺跡第18次調査出土石器・石製品実測図（1/3・1/6）

く研がれて鋭利である。

SU33 (Fig.19)

調査区南端部にて検出した。溝SD04によって大きく削られるほか、台地縁辺が後世に削られたこと、既存建物建築時の基礎杭も手伝って残りは全貯蔵穴のなかで最も悪い。底面は円形を呈するところ、概ねフラットだが、不整形ながら2基のピットが検出された。梯子を据えるためのものとみられるが現場では確認し得なかった。埋土はローム土をブロック状に含む黒褐色土で、人為的に埋め戻されたことが窺える。遺物は出土しなかった。

SU37 (Fig.19)

調査区南端部にて検出した。既存建物建築時の掘削や基礎杭の影響を受け、のこりは悪い。壁面は隅丸方形形状だが袋状の断面形を有する貯蔵穴であったと推測される。SU34と切り合うが壁面が杭によって壊されているため先後関係は分からなかった。SU36と壁面の厚さ8~10cmを隔てて接続する。壁面は概ねフラットだが、南東隅付近に径10cm、深さ20cmを測る小穴を1基検出した。対になるピットもなく用途は不明である。埋土は拳大のローム土をブロック状に含む黒褐色土で、人為的に埋め戻されたことが窺える。遺物は出土しなかった。

⑥性格不明の遺構（SX）

性格不明の遺構として住居址様の浅い遺構・柱穴状の遺構・貯蔵穴様の遺構を挙げた。とりわけ貯蔵穴様の遺構は3基並列し、丘陵斜面から内部に進入する形態で、中世の地下式土塙の可能性があるため本報告では暫定的に貯蔵穴から外して別個に報告するものである。

SX02 (Fig.22)

調査区北端で検出した。住居址様の略方形の遺構で長軸を南北方向に持つ。長径2.5m以上・短径2.8mを測る。埋土は黒褐色土で自然堆積である。壁溝・貼床は検出されなかった。北東部に埋土に焼土粒を含むピットを検出したが、壁面の被熱がなく炉跡とは認めがたい。底面からピットを多数検出しているが、いずれも浅く不整で現場では柱穴とは考えられなかった。遺物は弥生土器・土師器の細片が少量出土するにとどまった。

出土遺物 (Fig.24)

4は弥生土器甕である。底部の破片で、底面はやや丸みを帯び器壁の磨滅が顕著である。

SX22 (Fig.22)

調査区北東部、SD04の屈曲部で検出した。最初の遺構検出で検出漏れし、SD04との切り合を見落としたため先後関係を現場では確認できなかった。略円形のピットの北側に方形のテラスが付随し

た柱穴状である。底面は南に向けて広がり壁面はオーバーハングする。埋土はローム土のブロックであり、間に灰色砂質土を少量挟むが、隙間が目立つ。遺物が出土せず時期は分からぬ。埋土の状況からごく新しい搅乱の可能性も考えられる。

SX18 (Fig.23)

調査区東縁辺部中央付近で検出した。貯蔵穴様の掘り込みが2基連接する遺構である。連結部分は10~15cm低く掘り下げられ、1段高い東側にはさらにテラスが削り出され、階段状となる。東側の北壁付近にはピットが2基検出された。深さ20~40cmを測る。土層断面からは人為的な埋土は認められず、黒褐色土とローム土の互層で壁面が崩落しつつ自然に埋没した状況が窺える。東側と西側の間に1箇所不整合が観察される。現状からは東側の台地斜面から西側に進入したと考えられるが、東側が貯蔵穴として先行して構築され、埋没後西側に向け再掘削を行い地下式土壙とした可能性も考えられる。直接時期を示す遺物が出土しておらず時期は不明だが、地下式土壙であれば中世の遺構となる。

出土遺物 (Fig.24)

6は平瓦の小片である。隅角が残り凹面に布目、凸面に繩目叩き痕が観察される。7は須恵器長颈壺の頸部で胴部に接する部分である。8は土師器碗である。底部の小片で、底径6.8cmに復元される。9は須恵器高台付き壺である。底部の小片で、底径10.2cmに復元されるが小片のため不確実である。

SX19 (Fig.25)

調査区東縁辺部中央付近で検出した。略円形の地下室の東側に方形の出入り口がつく遺構である。出入り口との間にはローム土を削りだした間仕切りが設けられ、敷居状を呈する。調査時には地下室側に崩落した直方体状のローム土を検出でき、間仕切りは図にみるごとくの段状ではなく一定の高さを有していたと推測される。土層断面からは中途まで東側から人為的に埋められた後、壁面が崩落しつつ埋没していた状況が窺える。

出土遺物 (Fig.25)

いずれも弥生土器だが崩落土からの出土で時期を示すものではない。1は壺である。肩部に1条沈線を巡らし、胴部の小片で胴部径35.2cmに復元される。2は甕である。口縁部の小片で被熱する。口径20.6cmに復元されるが小片のため不確実である。3・5は壺底部の小片である。3は底径9.6cmに復元される。5は器壁の磨滅が顕著で、底径10.1cmに復元されるが小片のため不確実である。

SX21 (Fig.25)

調査区東縁辺部、SX18・19に挟まれる地点で検出された。SD04に切られる。略円形の地下室の東壁に幅60~80cmの通路が設けられ、台地斜面から出入りできるようになっている。底面には卵形の掘り込みが認められるが、ローム土が床に貼られ凹凸は埋められている。西壁面には2箇所、水平方向の掘り込みが検出された。何れも奥行き40cm程度で、用途は不明である。土層断面から、深さ20~30cmまで人為的に埋められた後、壁面が崩落しつつ埋没していた状況が窺える。遺物は須恵器甕および弥生土器の磨滅した細片が各1点出土したのみで、時期は明確にしがない。

⑦弥生時代以降の石製品 (Fig.26)

1・2は滑石製石鍋の再加工品である。SD04出土。いずれも小片で2には内面から穿孔がなされる。3・4は円盤である。SD04出土。安山岩または玄武岩質で、人為的な加工の有無は明確でないが、形状・色調から碁石あるいは土器の器壁を磨く工具の可能性が考えられる。5は台石か。SX18出土。石材の質は今山産玄武岩に似る。全体の約40%を欠損し、縁辺を中心に剥落が目立つ。

3. 麦野A遺跡18次調査出土の旧石器資料について

本次調査では少量の旧石器時代資料が出土した。安定した同時期の包含層から出土したものではなく、全て二次的に遊離し、後世の遺構内覆土中へ混入している。調査地点は御笠川西岸の中位段丘端部にあるが、更新世後期のレス風化土（いわゆる「新期ローム」）層は平坦面や斜面でも失われ、全域で表土等の直下が鳥栖ローム上部となっている。弥生時代から中世末までの削平や掘削、また耕作などで旧石器時代の包含層は失われ、それまでの時代の遺構内に混入したものだけが遺存したと考えられる。

確実な旧石器時代資料として石器類6点がある。1、3～6は中世末の濠SD04覆土からの出土であり、2は弥生前中期蔵穴S U14からの出土である。表面に多数の傷や鉄分付着、数時期に及ぶ欠損（いわゆる「ガジリ」）が認められるものが多い。1は小型の二側縁調整ナイフ形石器である。先端、基部など多数のガジリと傷が見られる。漆黒色良質黒曜石の縱長剥片を素材とし、表面の風化は進んでいる。現存長2.2cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmであり、複元長は2.7cmと推定される。刃縁に微細な剥離が認められる。2は寸詰まりの使用痕ある剥片である。黒灰色不透明良質の黒曜石であり、針尾島系産と推定される。表面の風化は進んでいる。ガジリはやや少ない。平坦打面であり、剥片の背面には先行する縱長の2つの剥離面があり、打面を180°転移したと見られる。本剥離は階段状に終わっている。両側縁に微細剝離があり、使用痕かと考えられる。長さ2.5cm、幅2.4cm、厚さ0.7cmである。3は縱長剥片であり、良質のサスカイトである。表面の風化は進み、ざらつく。ガジリは少なく、先端の欠損も古い。打面は自然面であり、先行剥離も共通している。長さ4.0cm、幅2.6cm、厚さ0.9cmである。4は背面に自然面が大きく残る石核調整剥片である。黒灰色不透明良質の黒曜石であり、針尾島系産と推定される。表面の風化は進んでいる。ガジリや傷は多く、先端の欠損も新しい。打面は二面で構成され、主剥離面のウェイブは大きい。背面に1面の先行剥離があるが、同じ調整剥離であろう。現存長3.2cm、幅3.0cm、厚さ1.2cmである。5は背面に自然面が大きく残る石核調整剥片であり、一側縁に抉り状の使用痕がある。黒灰色不透明良質の黒曜石であり、針尾島系産と推定される。表面の風化は進んでいる。ガジリや傷は多い。現存長4.5cm、幅3.3cm、厚さ1.0cmである。6は幅広剥片を素材としたスクレイパーである。漆黒色不透明粗質で不純物の多い黒曜石を素材とする。背面に円礫状の自然面が残り、肉眼では南九州（日東系か）産出黒曜石に類似する。厚手の剥片を利用し、70～80°の刃縁を形成するが刃部の多くをガジリで失い、円刃をなすかは不明である。現存長4.6cm、幅3.8cm、厚さ1.3cmである。

以上の6点は調査区東側の比較的近い位置で出土したが、共伴関係が明確ではない。しかし、少ない資料ながら石器形態と組成、また強い風化度合いや石材組成に特徴があり、関連性ある資料と推定できる内容である。まず、小型二側縁ナイフ形石器とスクレイパーからAT下位と推定され、針尾島系黒曜石が主体をなす特異な石材組成も頗る。南九州産黒曜石の存在は驚きであるが、この時期に日東系黒曜石が特に搔器として広く供給されていることから矛盾はない。本資料は後期旧石器時代前半段階に比定される。

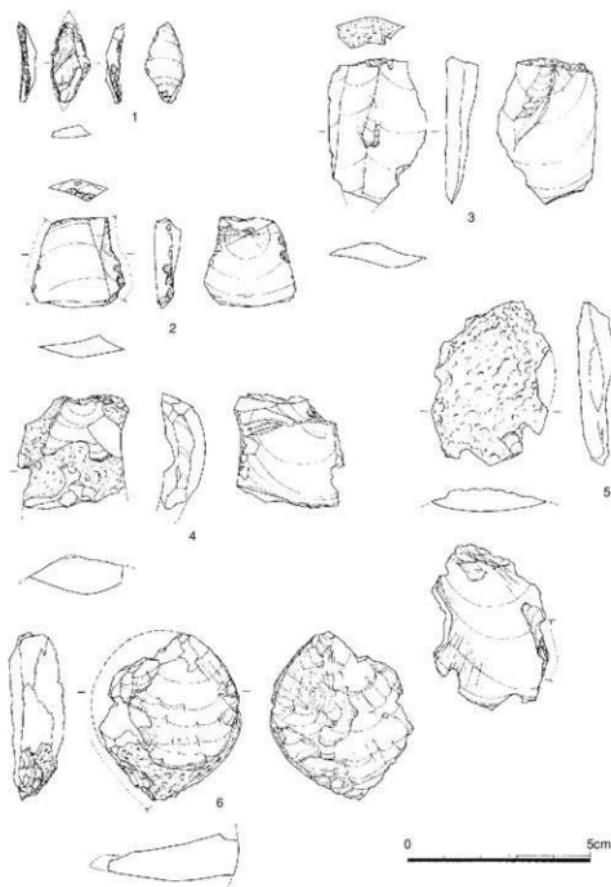


Fig.27 麦野A遺跡第18次調査出土先土器時代遺物実測図（1/1）

4. SD04出土の火打石について

1はSD04埋土中出土の鉄石英製火打石である。この鉄石英はプラスチックのような表面光沢を持ち、一つの石器の中に茜色やカラシ色が混ざりあっている。1は一見すると剥片石器石核のようであり、器面に走る稜線上に細かな剥離・潰れが残される。最大長5.2cm・最大幅3.3cm・最大厚2.8cm・重量45.8g。2はSD04埋土中出土の火打石の可能性をもつ石器である。節理の複雑に入った非常に粗質のチャート製。1のような稜線上の細かな剥離・潰れはほとんど見られないものの、民具等には潰れをほとんど残さない例も知られている。また、当石材は剥片石器用としてはあまりに粗質である。これらより、2は火打石として準備されたもの、あるいはほとんど使われることなく廃棄された火打石である可能性を残す。最大長5.3cm・最大幅5.0cm・最大厚2.9cm・重量86.5g。

1・2は15世紀後半～16世紀前半頃の麦野遺跡住人による火起こしの実態を示すと同時に、在地石材を主に用いる中世の火打石事情の典型例と評価される。なお、本例は福岡市内出土火打石の初報告例となったが、博多遺跡群の火打石について、福岡市埋蔵文化財センター収蔵資料中より検索中である。これまでの成果では、博多遺跡群での火打石最古例は8世紀後半から9世紀初頭にあること、鉄石英製火打石が中世に多数用いられたこと、徳島県阿南市大田井産チャート等のような広域に流通するブランド石材は近世以降に登場すること等が判明しつつある。詳細は別稿を準備中である。

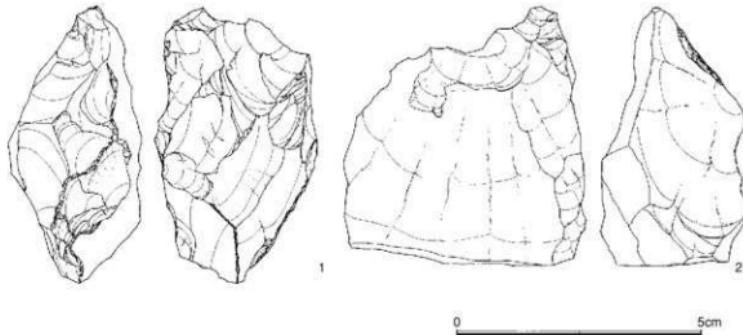


Fig.28 SD04出土火打石実測図（1/1）

第3章　まとめ

今回の調査では、先土器時代から中世に至る多くの遺構・遺物が出土した。ここでは紙数も限られているので、弥生前期の貯蔵穴および中世の溝に絞って所見を記してみたい。

今回検出された貯蔵穴は麦野近辺では初の調査例であり、調査地近辺に弥生前期の集落が展開していたことがわかる。台地縁辺部に集中していることから、居住域とそれ以外の部分について用途別の土地利用をしていたと推測される。配置は台地の縁辺に南北方向に集中している。斜面にかかる貯蔵穴があることから後世（おそらく近代以降）に斜面が削られたものとみられる。調査地北部は1段落ちるが、ここに貯蔵穴はない。旧地形をある程度反映している可能性もあり、それに分布範囲が規制されているのかもしれない。南に位置する第20次調査区でも1基の貯蔵穴が検出されており、分布域はこの範囲に収まるとしている。何れも断面形は概ね袋状となるが、出入り口の中心と見られる所と底面の中心は偏っていて、きれいにフラスコ状となるものは少ない。またトンネルで接続するものも多い。底面のプランは円形が大半で、方形は2基のみである。SU35のように円形プランのものと通路で繋がるものがあることから時期差によるものかどうか判断できない。底面の中心を1段掘り下げてローム土を貼るものが複数見られる。防水のためというのが妥当な見方かと思うが、底面からの浸水はごく少なく疑問が残る。

遺物は小壺が多い。何れも倒れて出土し、廃絶時に投げ込まれた可能性がある。朝鮮系無文土器を模して作ったとみられるものが2点出土している。何れも口縁部等に欠損があり破片が出土せず、意図的に一部を割り取っているとみられる。時期を判断するのは難しいが、他の遺物を含め弥生前期後半から末頃と推測される。ただしSU01出土小壺は古相を有し、前期前半まで遡る可能性もあるが、祭祀に用いる土器には古い要素が残ることもあり、ここでは判断を保留する。炭化米の出土が予想されたため底面付近の埋土を持ち帰りフローテーションを試みたが、サンプルから炭化米等の穀物を検出することはできなかった。

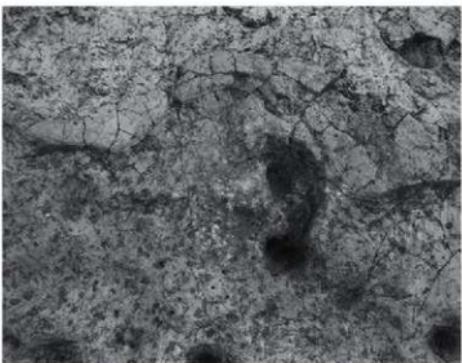
中世の溝SD04は調査地の多くの面積を占める大規模な溝である。西と南方向に延びる大略L字状を呈する。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、北側については複数回の掘り直しが断面観察から推測されるが、東側および南側ではほぼ単層といってよくくらい均一な堆積状況である。漏水していた状況は窺えない。この溝のみ埋土が暗褐色でクロボク状の土が混じらないことから、おそらくこの溝を掘削する際にクロボク層が失われるほどの大規模な削平がなされ、平坦面が作り出されたと推測される。

出土遺物は12世紀後半～15世紀にかけての時期である。Fig. 2に示しているが第20次・第9次調査区で溝の延長が、特に9次調査区では屈曲部が検出され、西に折れることがわかる。第6次調査区でも同一の溝と見られる中世の溝が検出されており、これらを合わせると概ね東西160m、南北120mを測る略方形のプランが復元できる。おそらく屋敷地を囲む区画溝で、いわゆる方形単郭の城館と推測される。しかし溝のプランは直線的ではない。Fig. 4・7から明らかなようにクラシック状の折れを持たせている。堀に折れを持たせるのは16世紀後半以降と考えられており、遺物の時期は15世紀頃を下限とするが、この溝にはより新しい時期に改修がなされていると推測される。そこで注目されるのが近世の編纂物『豊前覚書』中の記事である。天正9（1581）年に戸次鑑連が龍造寺氏攻略の際、麦野村に軍勢を置いたとするもので、SD04と直接の関係はわからず当該期の遺物は出土しなかつたが、断面観察から少なくとも溝の北面内側には土塁があったと推測され、埋没しつつあった方形溝を掘り直して陣地に改修した可能性はある。

1. 拡張区全景（南より）



2. SC06竪（北より）



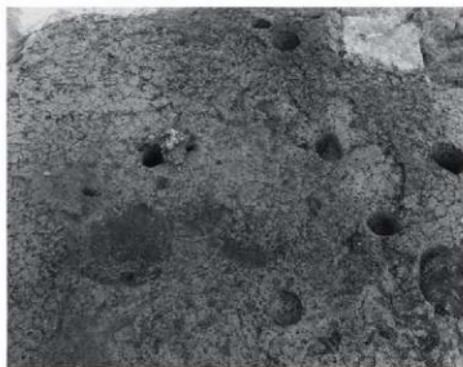
3. SC06竪土層（西より）



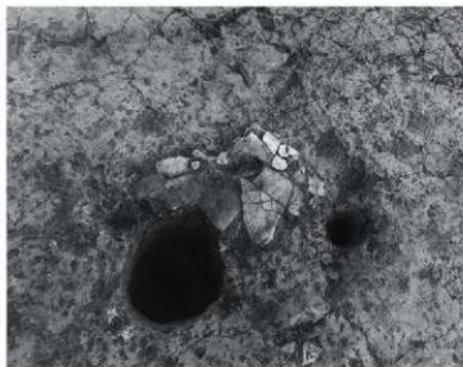
PL. 2



1 . SC08 (南より)



2 . SC11 (北より)



3 . SC11土師器出土状況 (北より)



1 . SC13 (東より)



2 . SD04A-A'土層 (南より)



3 . SD04B-B'土層 (東より)

PL. 4



1 . SD04C-C'土層（西より）



2 . SD04D-D'土層（南より）



3 . SK03（東より）



PL. 6



1 . SK20 (西より)



2 . SK26 (北より)



3 . SU01 (北より)

1. SU01弥生土器出土状況（北より）



2. SU07弥生土器出土状況（北より）



3. SU09東部（南より）



PL. 8



1 . SU09西部（東より）



2 . SU09弥生土器出土状況（東より）

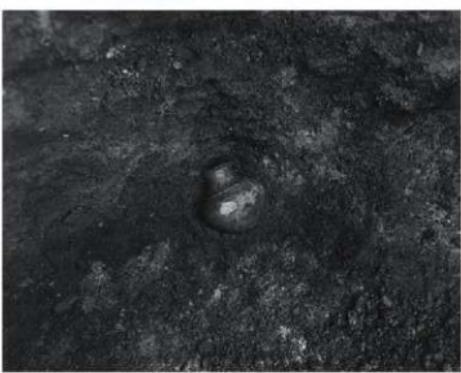


3 . SU10（北より）

1. SU10土層（北より）



2. SU10弥生土器出土状況（北より）



3. SU14（東より）



PL. 10



1 . SU14土層（東より）



2 . SU15（東より）



3 . SU15土層（西より）

1. SU15弥生土器出土状況（東より）



2. SU23（西より）



3. SU23土層（北より）



PL. 12



1 . SU24 (西より)



2 . SU25 (西より)



3 . SU27 (北より)

1. SU28 (南より)



2. SU29 (北より)



3. SU30 (北より)





1 . SU31 (北より)



2 . SU32 (西より)



3 . SU32石斧出土状況 (東より)



1. SU33 (西より)



2. SU34 (北より)



3. SU36 (北より)

PL. 16



1 . SU37 (北より)



2 . SX02 (南より)



3 . SX18東部 (北より)

1. SX18西部（南より）



2. SX19（東より）



3. SX19敷居状の部分（西より）





1 . SX21 (北より)



2 . SX21土層 (南より)



3 . SX22 (北より)

報告書抄録

ふりがな	むぎのえーいせき					
書名	麦野A遺跡					
副書名	麦野A遺跡第18次調査報告					
卷次	-					
シリーズ名	-					
シリーズ番号	5					
編著者名	阿部 泰之					
編集機関	福岡市教育委員会					
所在地	福岡市中央区天神一丁目1番8号					
発行年月日	平成21年3月31日					
調査面積	1,565m ²					
調査原因	宅地造成					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 (世界測地系)	東經 (世界測地系)	調査期間	
むぎのえーいせき 麦野A遺跡 第18次	ふくおか県福岡市 はかたこひがしの 博多区麦野 さんこううの町12番地 三丁目10番12	40130	0048	33° 33' 12"	130° 27' 40"	2007.4.23~8.28
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
むぎのえーいせき 麦野A遺跡 第18次	集落	先土器・弥生・ 古代・中世	貯蔵穴・竪穴住居・ 溝	石器・弥生土器・瓦・陶磁器	弥生前期の貯蔵穴群 戦国期の壠状遺構	
要約	<p>今回の調査では、竪穴住居・大溝・貯蔵穴・土壤等を検出した。竪穴住居は8世紀後半頃の住居址と推測される。大溝は深く一部クランク状に屈曲する部分がみられた。壠としての機能が推測される。貯蔵穴は台地の落ち際に集中して検出された。出土遺物から弥生時代前後半頃の所産とみられる。深さ2mを測るものがあるなど遺存状況は良好で、複数の貯蔵穴が連結するものが多いことが特徴的である。なお遺構埋土からナノフ形石器等の先土器時代の石器が出土している。</p>					

麦野A遺跡 5

—麦野A遺跡第18次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1054集

平成21年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 正光印刷株式会社

福岡市西区周船寺3丁目28番1号

